

「心理的安全性」のズレを埋める鍵 ～世代間ギャップを越えるために～

◆ 10年目のカウンセリングで見てきた若手世代の「賢い自衛」 ◆

心理士と顔見知りになっていただくための「新規採用教職員カウンセリング」も、おかげさまで県立学校担当者として10年目を迎えました。この10年で、若手教職員のみなさまを取り巻く空気感の変化を感じています。象徴的なのが心理状態をチェックするメンタルヘルスシート（事前配布）の扱いです。かつては「うっかり忘れ」を理由とした未提出の方が少数いらっしゃいましたが、ここ2、3年ほどは「提出したくない」とはっきりと自己開示する方も何人か現れています。これは決して反抗ではなく、自分の情報がどこまで共有され、どう評価に影響するかを慎重に見極める「情報リテラシーの高さ」の表れです。かつてないほどのリスク社会の中で、自らの身を賢く守ろうとしているのです。面談における「つかみ」のシートさえも「一度書いたら消えないリスク（データ）」に見えていたのかもしれない——そう感じ、シートの運用を今年度から取り止めることにしました。

◆ 「心理的安全性」のズレがもたらす「静かな諦め」 ◆

様々な職場で求められている「心理的安全性（周囲の目を気にせず、自分の意見や不安を安心して発言できる状態）」ですが、その捉え方には致命的な世代間ギャップがあるようです。「カウンセリング」ではなく訪問先や相談室での「雑談」を通して、私なりにそのギャップが見えてきました。

○管理職世代：少々ぶつかり合っても根底の信頼関係で繋がっている「タフな関係」

○若手世代：否定されたり、間違えたりするリスクが最初からない「摩擦ゼロの関係」



Illustration generated by Gemini

初任者研修等で「不祥事は絶対に許されない」という指導を受ける一方で、実際の現場には単独の密室対応や家庭訪問など、個人の判断に委ねられたリスクが残っています。こうした状況下で、若手は不安を口にすれば「熱意不足」と誤解されることを恐れ、声を上げられません。「本当は怖いけれど、プロとしてやるしかない」と、誰にも言えない不安を内側に溜め込みながら、沈黙して、心を摩耗させているのが彼らの切実な現状です。デジタルネイティブである若い世代に、昔からの精神論だけである意味「自衛」を求められる状況は厳しいもので、彼らが「複数で対応したい」、「個人のスマホを仕事で使うことに抵抗がある」と思うのは、真っ当な感覚であると考えます。

◆ 「不安の開示」は、周囲への最高の『親切』である ◆

若手教職員の皆様へ：「不安です」と伝えるのはわがままではありません。それは周囲に対し「私はこう扱ってくれば安全に、100%の力で動けます」という自分の『取扱説明書』を渡す“最高の親切”です。言葉にして初めて、周囲もあなたを守る準備ができます。

管理職・ベテラン世代の皆様へ：若手が口を閉ざす時、彼らは「正解のない問い」への恐怖と戦っています。結論を急かさず、まずは「何が不安？」とその感情をそのまま受け止めること。その対話の積み重ねこそが、令和の教育現場に必要な、新しい時代の「心理的安全性」を支える土台になるのではないのでしょうか。

参考文献



Illustration generated by Gemini

稲田豊史『映画を早送りで見ると人たちは』

☞ 若手が「失敗」を極度に恐れ、職場で、「最適解」を必死に探そうとする背景が分かります。

三宅香帆『「好き」を言語化する技術』

☞ 正解のない「主観」を言葉にし、周囲に親切に伝えるヒントが詰まっています。

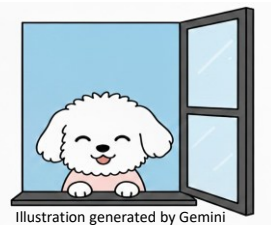


Illustration generated by Gemini

